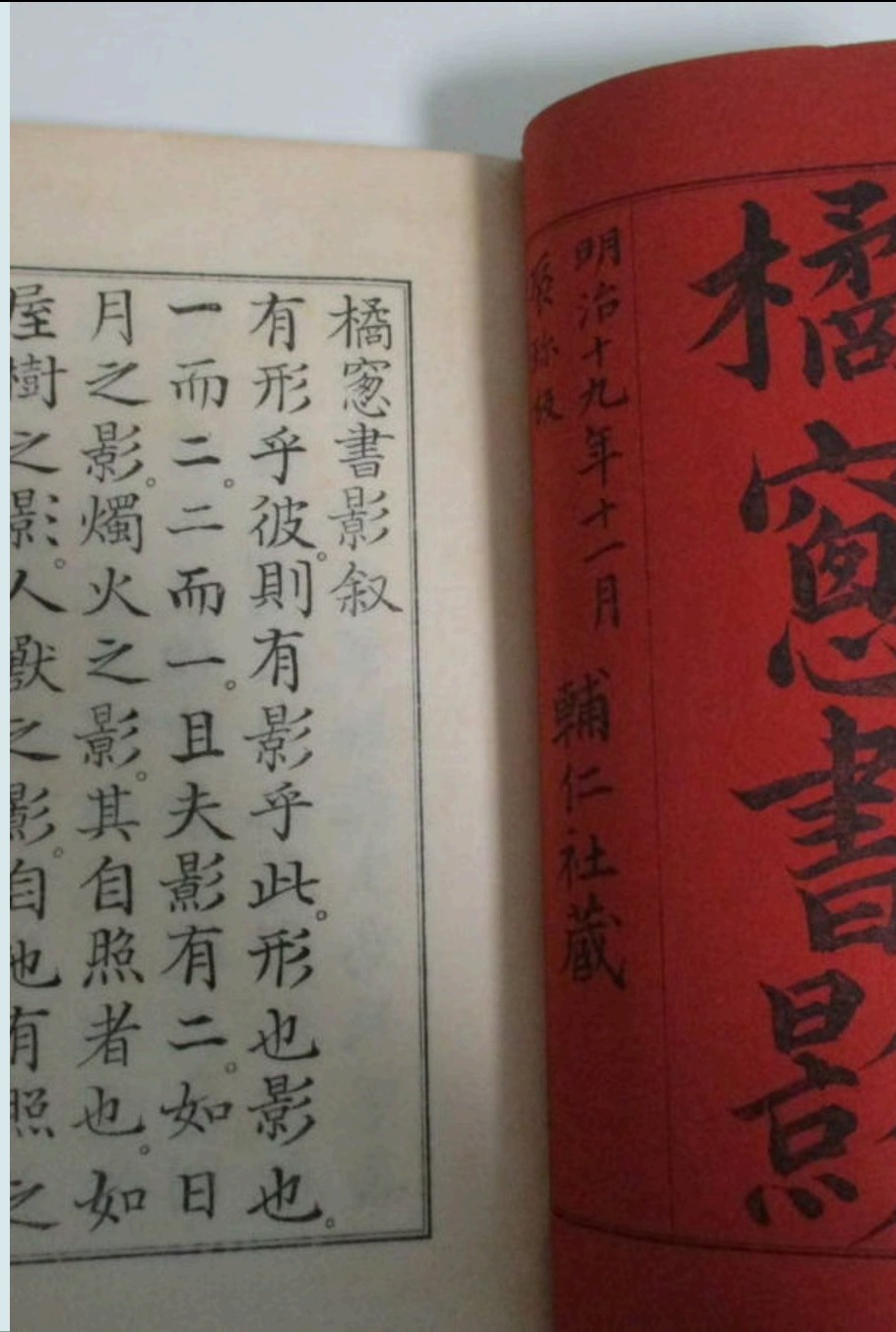
橘窓書影を読む
1–001～020

基　礎　理　論　§　現　代

峯　尚志

橘窓書影は浅田宗伯が1836年(天保7年）江戸で開業してから、1886年（明治19年）に至る約50年にわたる診療結果の治験録



症例1－001

麻疹流行

咳嗽、憤嚏、鼻水、まぶた腫れ流涙、顔の腫れ、悪心、乾嘔、頭痛、めまい、頬の下半分が腫れて、咽頭痛甚だし、

のどがイライラと、はしかいので『はしか』と俗にいう。

宗伯の麻疹の治療方針

（宗伯は9歳の時にはしかに罹患）

最初、葛根湯加桔梗にて発汗

寒熱往来に小柴胡湯、煩燥、口渇がでれば白虎湯

煩渇して、下痢するものに猪苓湯

余熱が除かれない者は竹葉石膏湯

微熱咳嗽止まない者には小柴胡加葛根草果天花粉

麻疹診断のポイント

- 発熱→咳嗽・鼻汁・結膜炎→コプリック斑（診断的価値）
- 耳後・頸部から始まり全身に広がる発疹
- 血清IgM抗体陽性・PCR法でウイルス検出

麻疹治療のポイント

- 特異的治療薬なし、対症療法中心
  - 解熱鎮痛薬（アセトアミノフェン）
  - 十分な水分補給・安静隔離
  - 合併症対策（肺炎、中耳炎、脳炎など）
- ビタミンAの投与（WHO推奨）
- 漢方治療も有用（銀翹散、升麻葛根湯など）

東洋医学ではしっかりと発疹させることが大切とされ、升麻葛根湯などが使用される。

1－002

女性、発疹が一日出て消え跡なく、心下痞硬、直視、喘鳴、脈洪数、悶絶死のごとくして、両親泣く。

診察すると脈はまだあるので、紫円（杏仁8.0、代赭石、巴豆、赤石脂各4.0、米糊）を与えると、たちまちに激しく吐き下しし、喘鳴が激しくなったので、その後麻杏甘石湯を与えてよくなった。

考察

本症例は、最初発疹が現れて呼吸困難を生じている点から、原因は不明だが、何らかのアレルギー物質の被曝によるアナフィラキシー反応が最も考えられる。現代なら、ボスミンの筋注がまずとるべき処置だろう。

漢方的には発疹がすみやかに消失したのは、熱毒が内攻した危険な徴候の可能性がある。その結果胸郭に痰熱が溜まり心下痞硬をおこしている。結胸とも考えられる。直視、悶絶死の如しとは、すでに気道が閉塞し、低酸素状態に陥っているものと考えられる。この状態で麻杏甘石湯は妥当な処方だと考えられるが、薬力が弱く、この処方を用いたところで救命することは難しいと宗伯は判断したのだと思う。そこで劇薬である巴豆を用いて、嘔吐下痢を引き起こし、強烈な副交感神経優位の状態を作り、陰極まれば陽の状態を期待して、交感神経作動薬の麻杏甘石湯を用いて救命したのだと考えられる。

紫円は巴豆、杏仁、代赭石、赤石脂からなり、君薬は巴豆で劇烈な瀉下作用により、通便・利水・瀉熱をはかる。杏仁は肺気を下ろし、喘息を止め、代赭石、赤石脂は胃気を下ろして鎮逆作用を持つ。以上の作用により胸郭や心下に停滞した水毒を瀉下することで、起死回生の効果を狙ったものだと考えられる。

悶絶死の如しは、まさに陰陽離決の生命の危機であり、現代においてこの治療はリスクが高すぎて、選択すべきでない治療であるが、現代において紫円を処方した症例があるので次に紹介する。

紫円の症例

症例1: 48歳女性

約2年前から起坐呼吸が出現。うっ血性心不全の診断にて加療中, 疲労時に再発した。下痢後に症状が軽快したことから, 紫円を投与した。十数回の下痢の後, 呼吸苦の改善と胸部レントゲン写真で心胸郭比の減少を認めた。

症例2: 64歳女性

約1年前に全身浮腫と食欲不振が出現した。全身性アミロイドーシスによるネフローゼ症候群と診断。補気健中湯と茯苓四逆湯の併用で浮腫は軽減した。しかし, 食欲不振が継続したため, 著明な心下痞鞕を目標に紫円を投与した。頻回の下痢と嘔吐後, 食欲の改善と心下痞鞕の軽減を認めた。

症例3: 71歳女性

約8年前に乳癌の手術後, 左上肢の腫脹が出現した。腫脹と便秘を目標に紫円を投与。投与日毎に下痢を生じ, 上腕径と体重の減少を認めた。今回の症例から, 紫円は心下痞鞕や便秘を目標にあまり虚実の差に捕われることなく水毒を目標に使用できる有用な方剤と考えられる。

1－003

真野幸次郎の妻の症例

分娩後、夜間にわかに発熱、咳嗽、口苦咽乾、舌上苔有り、舌苔白。

診察後おそらく麻疹だろうとして葛根湯加桔梗石膏を与えた。

翌日予想通り、顔が赤く腫れ、全身に麻疹を発し、往来寒熱、汗出で頭痛裂けるが如し、小柴胡加桔梗石膏を与う。2，3日して下痢して熱は大いにさがった。

考察

麻疹に罹患すると一時的に免疫が低下し、肺炎などの二次感染により重症化するおそれがある。本例は、妊婦であり、免疫的にリスクのある患者さんと言える。

診察時、発熱、口苦咽乾、舌上白苔あり、すでに少陽病期で小柴胡湯加減の時期と思われるが宗伯は先ず葛根加桔梗石膏を投与し解表の治療を優先させて、その後に発疹がでるのを待って小柴胡湯加桔梗石膏を投与している。

東洋医学では麻疹は透疹をちゃんとさせないと内攻して病気が悪化するという考え方があり、少陽病の徴候があっても宗伯は敢えて解表剤である葛根加桔梗石膏を投与し、発疹が出たのを確認して小柴胡加桔梗石膏を投与したのだと思われる。すなわち宗伯は発疹がでるまえに、これまでの経験からこの症例が麻疹であると診断し、少陽病期であっても解表を優先したところに、この治験の学びがあると考えられる。

1－004

広尾幕臣、辻氏、室。

症状

外感を得て表証解しての後、右足攣急、腫れ痛み、起きて動くことができない。脉浮数。

治療

金匱続命湯を与えて数日で癒えた

越婢湯の証で血虚を帯びるものを治す

五積散の主治するところに速効有り

続命湯（金匱）

処方構成

麻黄、桂枝、当帰、人参、石膏、乾姜、甘草、川芎、杏仁

右九味人参を去り、黄芩を加え、西州続命湯と名づく。風湿、腰脚攣急、痺疼を治す。

適応症

この方は偏枯の初起に用いて効あり。その他、産後中風、身体疼痛するもの、或いは風湿の血分に渡りて疼痛止まざる者、または後世、五積散を持ちうる症にて熱激しきものに持ちゆべし

考察

麻杏甘石湯で炎症性の浮腫をとり、

当帰、川芎の補血活血を加え、

桂枝で通経し人参で補気している。

考察

発熱のあと右足攣急、腫れ痛みがおこる病態としては痛風や、蜂窩織炎などが考えられる

炎症性の浮腫が起こっているので越婢加朮湯が頭にまず浮かぶ処方である。

本例では続命湯を投与しいるが、麻黄、石膏の組み合わせを持ち、炎症性の浮腫を取り去るのに妥当な処方だと考えられる。補血剤を含むことからやや慢性化した病態ではないかと考えられる。宗伯は歴節風、越婢湯の証にして血虚を帯びる者を治すと述べている。

1－005

桜田街、半次郎、妻

六月出産後、胸脇煩悶、心下動悸あり、ひどいときは身体が揺れている。鍼砂湯を与えたところ、数日後夏の終わりから11月にいたる長年の病が癒えた。

- 産後の動悸や不安感に対して鍼砂湯が効果的であった症例。長期間の症状が改善した。

鍼砂湯

1

処方構成

鍼砂、牡蠣、茯苓、桂枝、人参、蒼朮、甘草

2

主な効能

虚悸、短気、眩暈、虚煩并に黄胖を理す。この方の運用は多端、

もっぱら鎮墜をもって主となすなり。

3

処方解説

この方は苓桂朮甘湯に鍼砂、牡蠣、人参を加えたるものにて黄胖あるいは奔豚の症、動悸甚だしく、眩暈、短気の者を治す、また、下血後の動悸にも持ちゆ。この方と連珠飲とは症相近くして、鍼砂は胸動を主として、地黄は水分の動を主とするなり。

黄胖とは**顔色が黄色く、体がむくんで腫れているような状態、黄疸や、貧血、栄養失調や腎炎**

考察

本例は産後の貧血の症例と思われる。

お産により、鉄欠乏性貧血に陥ったのであろう

鍼砂湯は鉄を含む処方で、現代なら鉄剤の投与がファーストチョイス。

漢方は鉄剤とともに苓桂朮甘湯に四物湯を加えた連珠飲を考えたい。

鍼砂湯は上焦の熱や肝火が上逆し、強い興奮、精神不安、動悸、不眠、めまいなどに応用され、君薬は鍼砂で、成分は主に磁鉄鉱（Fe_3O_4）とされている。磁性を帯びており、強い吸着力があり、色は暗黒色～灰黒色で、粉末にすると細かい砂のような状態になるため、「砂」の名がついている。

鍼砂の性は寒、平で、味は辛、鹹、肝腎に帰経する。

めまい、耳鳴に用いられる磁石と同じ成分とも考えられる。

1－006　「共考」

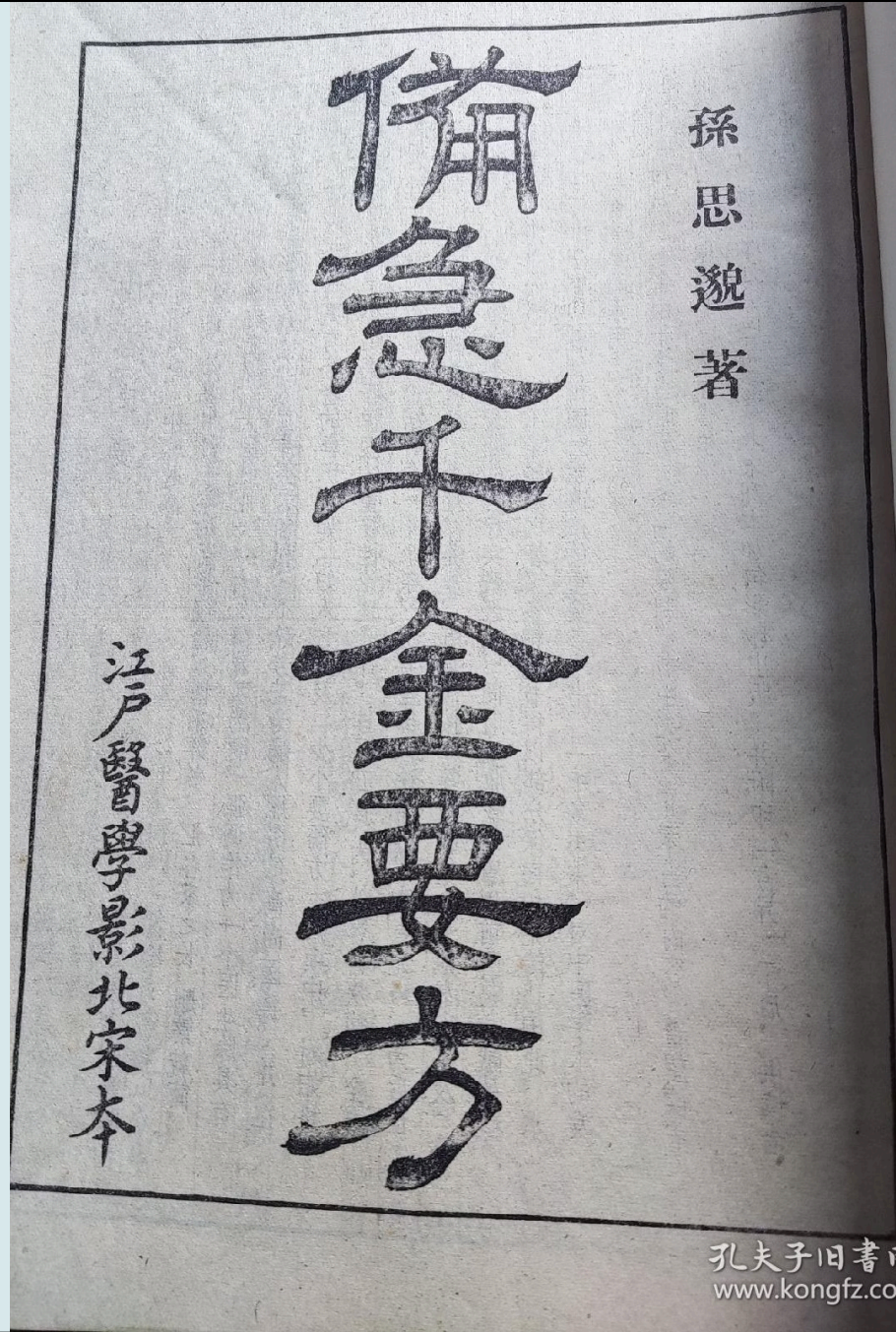
田中老公、妾の染井某、長年冷えると痛む病気があり痰があり、胸背部に走る痛みがあり、息苦しく、身体が重く、食べ物に味がなく、いろんな医者にかかるが効果がない。

○○湯を与えたところ、意外に効果があった。この人、老公が亡くなった後、尼になり知常となった。

考案（峯）

もともと脾虚あり、冷えが強く陽虚に至っている。身体が重いのは陽虚水滞と考えられる。正妻でないことによる心の気血両虚、痰は肺の病気というより脾は生痰というように肺脾の気虚から来るもとの考える。お腹と胸（心肺）の陽気を補う処方として当帰湯を推薦する。

→当帰湯《備急千金要方》:当帰5;半夏5;芍薬3;厚朴3;桂皮3;人参3;乾姜1.5;黄耆1.5;山椒1.5;甘草1



宗伯の処方

千金半夏湯

肺労虚寒、心腹冷、気逆游気、胸脇気満、よりて胸達背痛にて憂ひ、往来嘔気し、飲食即吐、虚乏不足するを治す

半夏、生姜各一斤、桂心四両、甘草、厚朴各二両、人参一斤、橘皮、麦門冬各三両、右八味、腹痛するは当帰を加う。

私は規則を傷寒論に立て、道を千金方の孫思邈ひろげ、東洞流と異なる道を歩んでいるが、なかなか深い趣がある。

1－007

龍土組屋敷、大田生、女

女性、長年痔があり。脱肛とまらず、これに灸すること数十壮したところ、たちまち発熱衄血あり、心下痞硬して嘔吐下痢した。ある医者が寒涼剤を与えてますます下痢がひどくなった。私が理中湯を与えたところ、漸くなおった。

考察

灸の温熱刺激が強すぎて熱が上昇して鼻血が生じ、胃熱により嘔吐し、熱が腸にもおよび下痢をするようになった。

長年の痔があり、脱肛しているので中気下陥の傾向がある。下痢により体表は熱くても中気下陥は進み、そこに寒涼剤を投与したものだから更に裏寒がひどくなり人参湯で裏寒を治してようやく治った症例で、誤治を重ねた症例と考えられる。その後は補中益気湯に排膿散及湯などをあわせて排膿と補気升提を兼ねる治療もありうると思う。

1－008

1

清水甫助の妻

症状

咳嗽、濁唾、生臭い鼻が出て、咳すれば胸郭に引いて痛み、往来寒熱、飲食を欲せず。

2

初期治療

大柴胡湯加桔梗石膏を与えること、2，3日、その熱大いに解した。しかし濁唾生臭い匂いが止まず、すなわち葦茎湯及び桔梗湯をつくり、交互にこれを飲ませたところ症状が改善した。

3

後期治療

その後、炙甘草湯をもって調理して完治した。この患者は他の医師が不治と診断し、余も難治と考えた。

考察

初期治療は、往来寒熱あり、大柴胡湯加桔梗石膏で少陽から陽明に至る病態を治療し、柴胡、黄芩、大黄、石膏で解熱している。しかし、生臭い濁唾、咳嗽は他の医者が不治と言うほどであるから細菌性の感染を伴っていたものと思われ得る。

葦茎湯は肺癰の処方で、抗生剤のないこの時代においては、その代用となる処方。

病後は炙甘草湯で人参の補気と同時に熱による傷陰を地黄、麦門冬で補い、方中の桂枝甘草で心の陽気を補って病後の回復を早めている。

葦茎湯

処方構成

葦茎、薏苡仁、桃仁、冬瓜子

特徴と応用

この方は平淡にして思いのほか効あるものなり、微熱と胸中甲錯とを目標にすべし、胸に甲錯あるは蓄血あるが故なり、蓄血なくとも咳血のあるによろし、若し咳嗽甚だしきものは四順散を合して効あり。福井楓亭は肺癰にまず『準縄』の瀉白散を用い効なきときは、この方を持ちゆとある。

葦茎

作用	詳細
抗菌作用	肺炎球菌、ブドウ球菌、大腸菌などに対する抑制作用
抗炎症作用	急性炎症・慢性炎症の炎症メディエーター（TNF-α、IL-6など）の抑制作用
免疫調整作用	肺感染症における炎症反応や免疫バランスの調整
利尿作用	腎臓の水分再吸収を抑制、浮腫の軽減
去痰・排膿作用	肺胞内の膿や分泌物を排出促進

葦茎と芦根　葦茎はアシ（ヨシ）の地上茎、芦根は地下根茎

薬理作用	葦茎（イケイ）	芦根（ロコン）
抗菌作用	△〜○ 軽度〜中等度（実験的報告あり）	△〜○ 軽度（限定的な実験的報告）
抗炎症作用	○ 中等度（肺炎・膿瘍など）	△〜○ 軽度（軽症の炎症性疾患）
去痰・排膿作用	◎ 強い	△ 弱い
利尿作用	○ 軽度〜中等度	◎ 比較的強い
生津・鎮静作用	△ 弱い	◎ 強い

麦門冬、芦根、葦茎の生津作用の比較

•

生薬名	生津作用の強さ	特徴・使い分け
麦門冬	◎ 非常に強い	慢性の乾燥症状（肺陰虚・胃陰虚）に対する代表的生津薬。
芦根	○〜◎ 中等度〜強い	急性熱性疾患の口渇・喉の乾燥・煩躁感に使用。
葦茎	△ 弱い	生津作用は弱く補助的。主に排膿・去痰を目的とする。

参考：銀翹散の処方構成

生薬名	主な薬能・作用
金銀花（スイカズラの花）	清熱解毒・抗ウイルス作用
連翹（レンギョウの果実）	清熱解毒・抗ウイルス作用
淡竹葉（タケの葉）	清熱・除煩
薄荷（ハッカ）	辛涼解表・清熱
荊芥（ケイガイ）	辛涼解表・清熱
牛蒡子（ゴボウの種子）	清熱利咽・咽頭症状改善
桔梗（キキョウの根）	去痰・咽頭症状改善
甘草（カンゾウの根）	諸薬調和・咽頭炎症改善
淡豆豉（タンパク質発酵食品）	解表・除煩
芦根（ヨシの地下茎）（※原典にはなし）	生津止渇・清熱除煩

参考：銀翹散の生薬とと抗ウイルス作用

•

生薬名	抗ウイルス作用の科学的根拠	作用の特徴・対象ウイルス
金銀花（スイカズラの花）	◎ 強い	インフルエンザウイルス、単純ヘルペスウイルスなど幅広いウイルスに有効。
連翹（レンギョウの果実）	◎ 強い	インフルエンザウイルス、RSウイルスなど多種ウイルスに活性。
板藍根（ホソバタイセイの根）※参考	◎ 非常に強い	インフルエンザウイルス、アデノウイルス、コロナウイルスなど幅広く強力な抗ウイルス活性。
牛蒡子（ゴボウの種子）	○ 中等度	インフルエンザウイルス、RSウイルスに中程度の作用。
淡豆豉（タンパク質発酵食品）	△〜○ 軽度〜中等度	軽度の感冒ウイルス抑制効果の報告あり。

1－009　「共考」

症例

佐藤元右衛門、請われて往診するに、傷寒8，9日、ある医者が誤治して壊証となり、頻脈で大便が腐った魚肉のようなものを下して、小便は赤く渋り、舌には苔がなく、煩渇、不眠、飲食できず、四肢がうずき傷んで、言葉がでない。この証は実にみえて実ではない。虚に似るが虚ではない。

考察（峯）

この時代の誤治は、熱を冷ますのに下法を用いておこる事が多い。

この症例でも傷寒で、発熱、悪寒、関節痛などの表証があに、下法を用いて、病邪が内陥してこじれてしまったのだと思われる。そうすると脱水により、血や津液が消耗する。舌に苔が無くなり、煩渇、不眠とあり、煩渇は口腔内の乾燥ととらえれば陰虚の症候と判断される。脱水により循環血液量が消耗して頻脈になっているのであろう。小便が赤いのも、脱水の時にみられる濃い尿をさしているのかもしれない。腐った魚肉のような便とはどんな便だろう。濕熱証に見られる臭気のある泥状便であろうか。そうすれば太陽病に下法は誤治であるが、もともと痰濁のある人かもしれない。飲食できず四肢がうずき痛んで、言葉がでない。傷寒八，九日とあるから、この四肢のうずきは太陽病による関節痛ではない。脱水により電解質異常をひきおこした結果生じる筋肉の引き連れるような痛みなのかもしれない。

私なら小柴胡湯に麦門冬、沙参、地黄、知母、石膏とするか。

宗伯の治療

私は脈を重視して参胡芍薬湯を与えたところ、諸症状が少しずつ改善し10何日で治癒した。
余嘗て小柴胡湯の証にして、虚に属する者を治するに補中益気湯を持ってし、大柴胡湯の証にして虚に属する者参胡芍薬湯を持ってす。
傷寒にかかってすでに8，9日が経ち、誤治により悪化した症例である。

参胡芍薬湯

《医学入門》

1

処方構成

柴胡、芍薬、枳実、黄芩、人参、地黄、麦門4、知母3、甘草2.5、生姜2

2

主治

傷寒十余日、外、除熱未だ解せず、脈息未だ緩ならず、大便不快、小便黄赤、或いは渇し、或いは煩し、安睡を得ず、飲食を思わざるを治す。これ邪気未だ清からず、正気未だ復せず、当にその虚実を量ってこれを調うべし。

3

処方解説

この方は大柴胡湯に半夏、大棗を去り、知母、人参、生姜、麦門冬、甘草を加えたる者にて、その症もほぼ大柴胡湯に似たれども、その脈腹、大柴胡湯ほどの実したる所なく、また胸中に飲を蓄わふる様子もなく、ただ熱、荏苒として数日を経、津液枯燥して解すること能わざる者に持ちゆ。東郭の説に、全てかようの所に生姜を主剤として用ゆるは、実証の解熱に石膏を用ふると同段にて、多年用いて効験多し、今この方の中に知母、生姜とくみたるは、即ち実証に知母、石膏と組みたると同趣意なり。

1－010

渋谷御賄陸尺、佐藤元右衛門、往診。

70歳過ぎの男性。まぶたが渋くただれ、時にまぶたの皮が腫脹し、数年治らない。

年齢により、血気が枯れ、風がこれを侵しているので、気薬でこれを燥すべしと。準縄柴胡散（柴胡、羌活、防風、芍薬、桔梗、荊芥、生地黄、甘草）を与えて治癒した。

一老人、眼涙止まず、両眼びらんするもの、止涙補肝湯:当帰、川芎、芍薬、熟地黄各4.0、木賊、蒺藜、夏枯草、防風各2.0を用いて効果があった。すなわち四物湯に蒺梨子、夏枯草、防風を加えたもの。

収涙飲:

荊芥、防風、独活、黄連、黄芩、梔子、川芎、木賊、

菊花、薄荷、夏枯草、地黄各3.0

1－011

1 症状

40才男性。膈噎。食道の閉塞感。ものを食べたら悉く吐き出し、手足が枯れたようになり、その人死のうとする。

2 診察所見

診察すると心下から中脘の間に凝結とかの様子はない。病、食道にあって、年をそれほどとっていないので半夏厚朴湯を与えてその気を理し、時々、解毒丸を用いて、大椎から7椎したまで、毎回7，8壮、5，6日を過ぎて咽頭の間に火が燃えるような感じが出た。

3 治療経過

試しに冷水を飲むと高速の病気はなく、気持ちよかった。これ以来、飲食が食べられるようになって治った。

年老いたものが、膈噎を止むときは痩せて羸瘦して、ごろごろつぃた石の塊のようなものがある。この患者さんは、年齢が若く、腹中に塊がないので、奇病ではなく、治せる病である。

すなわち食道癌もどきの膈噎であった

考察

- 「膈噎（かくいつ）」は、主に中医学（中国伝統医学）における病名であり、**飲食物が食道を通りにくくなる**、あるいは**通らなくなる病態**を指す。現代医学でいえば、**食道狭窄、食道癌、食道アカラシア、神経性嚥下障害など**に相当する。

膈噎の定義（中医学的観点）

・「膈」は横隔膜を指し、広義には「胸膈部（胸と上腹の間）」の障害を表す。「噎」は「飲食が咽（のど）を通らない」ことを意味します。よって、「膈噎」とは**飲食が胸膈のあたりで停滞し、咽に通らず、つかえる感覚がある状態**を指す。

- 本例では飲食物が喉を通らないことより、食道癌がまず最初に浮かぶ病態である。ただ年齢が四十代と比較的、若く、宗伯は気滞を目標に半夏厚朴湯を処方して事なきを得ている。

1－014

症例

3才男子、発熱、嘔吐下痢、脈弦数、身体が焼けるように熱く、時々心下に衝き、顔色青く、眼が閉じて開けず、煩渇して、脱水の様子、厥陰寒熱錯雑の証として乾姜黄芩黄連人参湯を与える。無効のため、死んだ。

宗伯の反省

私はこの症例を悔やんで、早く大承気湯を与えて下さなかったことを悔やんでいる。

考察

脱水と中枢神経症状を伴う熱性疾患あるいは感染性ショックの可能性が高いと考えられる。

輸液の絶対的適応だが、輸液のない時代、陽明の熱を冷ますために起死回生の大承気湯を処方するべきだったと宗伯は反省している。

1－015

症例

産褥熱に柴胡桂枝乾姜湯加呉茱萸、茯苓

中年女性、産後悪露尽きた後、時々、悪寒して顔が熱く、舌が赤く糜爛し、頭汗出でて心下微結、腹満、小便不利、腰以下微腫あったが、誰も治した経験がなかった。

治療と経過

診察して血熱蓄飲を挟む証として、柴胡桂枝乾姜湯加呉茱萸茯苓を与えた。この処方を秋から春に至るまで継続して半分癒えた。さらに継続して完治した。

考察

- **産褥熱は産後24時間以降から産後10日以内、多くは産後2，3日に、38.0℃以上の発熱が24時間以上持続**するものを指す。本例は産後の悪露から感染し産褥熱を引き起こした感染が長引き、慢性炎症を起こしたものと考えられる。
- 多くは細菌感染を伴っており抗菌剤の投与が不可欠である。本例において抗菌剤を使用せずに治癒しているが、秋から春まで服用してようやく治癒しているのは、抗生剤のない時代としては仕方の無いことであったろう。
- 時々悪寒して顔が熱く、頭汗出でて心下微結はまさしく柴胡桂枝乾姜湯証と思われ、柴胡黄芩で疏肝清熱し、桂枝甘草牡蠣で気の上衝を治し、栝楼根、牡蠣で心下の微結をとっている。
- また、裏寒を治す甘草乾姜の組み合わせがあり、脾胃の陽虚が柴胡桂枝乾姜湯証の背景としてある。宗伯は更に呉茱萸を加味して悪心嘔吐、腹痛を治し、茯苓で脾虚による水滞を予防し、動悸を治し、安神効果を期待している。
- 以後、浅田流漢方では宗伯以後柴胡桂枝乾姜湯加呉茱萸茯苓として聖光園細野診療所の約束処方のひとつとなっている。

1－016

臨月の外感に麻黄湯加附子

某人の妻、臨月で破水して後、悪寒して腰痛がひどく分娩できず、前医は破血剤を与えた。診察すると脈浮数、肌熱があるため、おそらく外感と考え、麻黄湯加附子を与えて温覆して発汗させたところ、しばらくして、腰痛がやや楽になって、陣痛を発した。そこで産期がすでに至るとして分娩させたところ、たちまち女児を出産した。

1－017　前胡湯

1

処方構成

前胡、半夏各3両、生姜、黄芩、呉茱萸、防風、麦門冬各1両、人参、大黄、当帰、甘草各2両、杏仁30枚

2

症例

田中老侯の妾、

心下から脇下にいたり、痞鞕が激しく、脈沈遅、すなわち千金前胡湯を与えて数日、痛みが減じ、心下が楽になった。ただし、手掌煩熱、腰腹拘急す。そこで温経湯を与え、すっかり楽になった。

3

適応症

千金前胡湯は胸中久寒し、癖実宿痰し、膈が塞がり胸痛し、通じなければ、三焦の冷熱が整わず、飲食少なく、味がなく、あるいは寒熱身体重く、横になって起きることができないものに用いる。

参蘇飲

主要生薬

前胡、蘇葉、葛根、桔梗、枳実、半夏、人参、甘草、生姜、大棗、陳皮

知乎 @不居

前胡

基原

セリ科のノダケの根

性味

苦、辛、微寒

帰経

肺

薬能

降気消痰

宣散風熱

肺熱、肺気不宣の喘咳脹満や風熱外感に有効、肺熱兼表証に最も適している

前胡、柴胡は発散に働き、散風解熱に働くので二胡は風薬足りといわれるが、前胡は肺経に入り下降を主るのに対し、柴胡は肝胆経に入り上昇を主る。

1−018

1 症例

東福寺の用部屋、西村保蔵、中高年男性。口に腫れ物ができて、発熱、脈数急、飲食できず、発語できず、小便赤渋、大便不通。

2 治療経過

宗伯、腫れ物の四辺を瀉血して左突膏を生乳で伸ばして傷に張り、加減涼膈散を飲ませた。瀉血処置を3日継続したところ腫れは縮小し始めて膿が出てきた。そこで破敵膏を塗りつけ、黄連解毒湯加玄参牛蒡子大黄を服用させた。そのとき、両目に白い肉が盛り上がり、膿が出てきた。一方基の腫れ物は治ったが、昏睡し、いびきをかき、3月14日に遂に他界した。

3 使用した軟膏

左突膏:松脂800;黄蝋220;豚脂58;ゴマ油1000

破敵膏:左突7;青蛇3

考察

- 口に腫れ物とあるが、詳細な部位は不明、口腔内の腫れ物と考えた。
- 発熱もあるので、急性の病気としては急性喉頭蓋炎が考えられる。
- 喉頭蓋炎は目視できる扁桃部で無く気道の入り口である喉頭蓋に炎症をおこすので、目視できる範囲の腫脹が改善しても深部の炎症が進めば、気道を塞ぎ生命の危機を生じる。
- もう一つの可能性は咽喉頭の癌である。悪性腫瘍のため一時的な改善をみても、別の場所に転移し、二次感染を起こして炎症が進行する。両目に盛り上がった白い肉というのも転移性の腫瘍と二次感染の可能性がある。
- 最終的には昏睡し、いびきをかいて他界とあり、いびきは気道の閉塞をあらわすものかもしれない。
- 或いは咽喉頭の感染や傷から蜂窩織炎をおこし、そこから敗血症に至り死の転帰をとったことも考えられる。
- 瀉血は瘀血を取り、腫れを引かす処置としてはよかったかもしれないが、創部のデブリドマンとしては不完全で、左突膏で保護できず、感染の悪化を招いた可能性も考えられる。
- 西洋医学的には気道の確保、酸素投与などの呼吸管理が第一で、その上で輸液と抗菌剤の投与、CT等による原因病変の探求が不可欠である。

漢方の軟膏1

1

紫雲膏（別名）やけどの妙薬

- 出典: 華岡清州創製
- 使用生薬: 紫根、当帰
- 使用目的: 外傷、火傷、痔の疼痛、肛門の裂傷、ひび、あかぎれ、しもやけ、ただれ
- 特徴: 水疱程度までのやけどは跡が残らない
- トピックス: 紫根（痔疾患用）主剤の軟膏
- 使い方: 通常は薄く塗布、やけどは全体にあつく塗布

2

タイツコウ軟膏（別名）神仙太乙膏

- 出典: 和剤局方
- 使用生薬: 当帰、桂皮、芍薬、大黄、地黄、玄参、白
- 使用目的: 床ずれ（褥瘡）、切り傷、痒み、湿疹、虫ささされ、やけど、肉芽形成等
- 特徴: 応用範囲が非常に広く、あらゆる化膿性湿疹、難治慢性湿疹に
- トピックス: 寝たきり老人の床ずれに。
- 使い方: 擦り込まずに、のばすように使用。傷の場合ガーゼにのばして。

漢方の軟膏2

1

中黄膏（別名）散らし膏

- 出典: 華岡清州創製福地石海改良
- 使用生薬: 鬱金、黄柏、山梔子、黄連
- 使用目的: 消炎、鎮痛、腫れ物、打ち身、捻挫、しもやけ、あかぎれ、痔
- 特徴: 幹部の赤み、腫れ、熱、化膿等を緩解し散らす
- 使い方: リント布に厚めにのばし患部に貼付する

2

破敵膏（別名）吸い出し膏

- 出典: 春林軒膏方便覧
- 使用生薬: 乳香、烏賊甲
- 使用目的: 腫れ物からの毒素吸い出し、化膿症
- 特徴: 膿がなかなかでない腫れ物に最適
- 使い方: リント布に厚めにのばし患部に貼付する

加減涼膈散（浅田）

処方構成

連翹3;黄芩3;山梔子3;桔梗3;薄荷2;甘草1;大黄1;石膏10

原方との比較

涼膈散:大黄・芒硝・炙甘草各2;山梔子・薄荷・黄芩各1;連翹4

1－19　「共考」

越中の医学生、野中良俊、風寒、喘鳴激しく、数日起坐呼吸、自薬を服すが効果なし、宗伯診するところ、邪は肺についている。他の痰飲の処方ではなくて、○○湯を投与したところ、患者は大いに喜び、数日で全治した。

峯　考察

- 若年者、風寒、喘鳴、起座呼吸とあるから、喘息性気管支炎の症例と考えられる。
- 風寒、喘鳴であるから、小青竜湯がいちばん先に浮かぶ。喘鳴が激しければステロイド吸入の併用。
- 起座呼吸とあるから、麻黄の量は多めに使う。さらに気管支粘膜の炎症性浮腫を取るために杏仁、石膏を加える。
- 即ち小青竜湯加杏仁石膏の処方とする。
- エキス剤なら小青竜湯合麻杏甘石湯あるいは五虎湯で、今中先生の虎龍湯を選択する

宗伯の処方は外台橘皮湯

後世名　神秘湯

処方構成

麻黄、蘇葉、橘皮、杏仁、石膏

余、あるいは石膏を去り、厚朴を加える。

浅田家神秘湯（現代のエキス処方）

柴胡、麻黄、杏仁、厚朴、陳皮、蘇葉、甘草

外台、備急神秘湯

橘皮、生姜、紫蘇、人参、五味子

喉裏吼声気絶の神秘湯

麻黄、乾蘇葉、橘皮、柴胡、杏仁

王碩「易簡方」の神秘湯

橘皮、人参、五味子、桔梗

楊仁斎『直指方』

橘皮、人参、五味子、桔梗、檳榔、半夏、桑白皮、甘草、生姜

李東垣『医学発明』神秘湯

陳皮、紫蘇、人参、桑白皮、茯苓、生姜

宗伯はなぜ神秘湯を選んだのか

神秘湯は止咳平喘の麻黄、杏仁、甘草で気管を広げる一方で、柴胡、厚朴、半夏、蘇葉で気鬱を治す。

本例においては、医学生という情報しかないが、若い世代の悩みをかかえていることが、喘息の発作に関与しているという宗伯の望診が神秘湯を選んだ要因かもしれない。

1－20

症例

発熱、妄語、身体の痛みに犀角湯

若松屋藤治郎

歴節痛、発熱、妄語、不能食、便秘して小便渋

医者は傷寒とし投薬するも効果なく、宗伯は千金犀角湯加黄連を用い、2，3日で寄効を得た。

その後、この方で熱毒、歴節風に著効する

犀角湯処方

麦門冬、茵蔯湯、伏苓、熟地黄、山梔子、竹葉、生姜、犀角

犀角

基原

サイ科のインド犀、ジャワ犀、スマトラ犀などの角、善2者の角が良品。

性味・帰経

性味）苦、酸、鹹、寒

帰経）心、肝、腎

薬能

- 清心定驚
- 涼血解毒
- 犀角は寒性で心、肝、胃経の血分実熱をさまし、清心定驚、涼血解毒に働き、血分熱毒を清解する。

考察

発熱、妄語、不能食、便秘して小便渋に対して医者は傷寒と考え葛根湯や麻黄湯などの辛温解表薬を投与したと考えられる。

妄語して便秘、小便渋（不利）ということは、陽明経証の白虎湯証を超えて陽明腑証の大承気湯の適応であったかもしれない。

辛温解表薬によって、津液は消耗し、熱は更に盛んになり血分も消耗したものと思われる。

そこで宗伯は、熱が陽明腑証からさらに血分にまで侵入しているものと考え犀角湯を与えたものと考える。

すなわち、宗伯は中医の温病理論の衛気営血弁証も学んでいたことが分かる。ただし、犀角湯の地黄は生地黄であることが望ましいだろう。

また、この後、熱毒、歴節風に著効する、とある。関節に熱を持った関節痛の病気、リウマチや痛風などが考えられる。おそらく歴節風も罹病期間が長く、血分にまで熱を帯びていたのかもしれない。ここでも犀角の血熱を治す作用が著効したのだと考えられる。